

公開講演会発表要旨

平城京再現 一成果と課題一 平城宮跡の発掘調査も30年目を迎え、その成果を広く知って頂くため特別展を企画した。既に10年目および20年目の2回、同じ趣旨で展覧会を開催したが、今回は京都・東京の両国立博物館を会場とすることができ、指定品も数多く出陳願って天平文化の厚みを一層広く理解して頂けたことと思う。30年間の発掘面積は37万㎡に達し、この間に東院の発見、大極殿・朝堂院の転移と併存、諸宮衛の配置と形態、大嘗祭跡の発掘など数多くの成果をおさめた。また木簡などの出土品を通して当時の制度や経済の具体的な様相をかなり細かく描き出せるようになった。近年では開発の進展と共に京域での大規模調査が増大し、長屋王邸の発見をもたらした。今後の期待も大きい。

(鈴木 嘉吉)

平城京発掘30年 帝塚山短期大学 青山 茂氏 平城宮の発掘は、昭和34年に国が直営事業で調査を開始してから30年たつ。しかしそれまでに保存と調査の前史があった。幕末に北浦定政が調査の先鞭をつけ、明治中期関野貞等の研究をうけて棚田嘉十郎は保存顕彰に献身的努力をし、これが元となって大正8年史蹟に指定される。昭和28年には内裏北部の道路拡幅に伴い掘立柱穴が発見され、これを機に国営の調査が始まる。昭和34年に奈文研が計画的調査に入り、昭和36年には最初の本簡を掘り出している。しかし昭和36年から史蹟未指定の宮域西半部の近鉄車庫建設計画に対し保存運動が起こった。その結果当時画期的な4億円の買い上げ予算が計上されたが、なお国家予算と比べると微細なものであった。

(山岸常人抄録)

犬、猿、馬—古代人の生活と動物 長屋王邸宅跡からはさまざまな動物に関する資料が出土している。なかでも墨書土器に描かれた猿、犬?の姿。木簡にみられる犬、馬などが代表的な動物である。そこで、この講演会では、このような動物の骨が、全国の遺跡からどのように出土し、日本人とどのようなつながりを持っていたかを考察した。その結果、猿は、縄文時代以来、特に西日本においてイノシシ、ニホンジカに次ぐほどの出土例を示し、食用にされていた。犬は人間の伴侶として縄文時代のはじめから人に飼われていたが、奈良時代の貴族は鷹狩を好み、長屋王邸では鷹犬の調教のために、米の餌を与えていた。馬については乗馬が普及したのは5世紀になってからで、従来いわれていた縄文時代の馬の存在を否定した。

(松井 章)

馬をめぐる古代まつり 八世紀初頭に始まる律令(的)祭祀は、古墳時代祭祀とは理念・体系が大きく違う。それは中央(平城京)で成立し、地方へ伝播した。ここでは、長屋王邸の北から出土した最古の絵馬(737年頃)をとりあげ、意義を考えた。まず、古代の馬形遺物のなかで絵馬が占める位置を明らかにし、ついで、絵馬は民間信仰が先行しこれを中央祭祀が吸収したとする説を否定。逆に、中央から地方、の図式が成立することを論証した。なお、長屋王邸で見つかった猿の絵皿は、古代の馬と猿の関わりを明らかにする。この猿は、長屋王邸の鹿の守護神であり、従来の馬と猿との関わりは中世以降とする説は、八世紀初頭と改める必要がある。

(金子裕之)